

歌唱表現を創意工夫する学習指導の工夫

— ファシリテーション基礎スキルを用いた題材づくりを通して —

庄原市立高野中学校 久保田 園子

研究の要約

本研究は、歌唱表現を創意工夫する学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、歌唱表現を創意工夫する学習指導とは、試行錯誤する中で変容するイメージを基に、思いや意図を深めたり新たなものにしたりする学習過程を設定することと定義した。所属校では、思いや意図を深めたり新たなものにしたりするために必要な音楽科の特質に応じた言語活動が適切に位置付けられず、言葉によるコミュニケーションが音楽によるコミュニケーションの充実に結び付いていないという課題が見られた。そこで本研究では、言葉によるコミュニケーションをより充実させて言語活動を適切に位置付けるため、中野民夫（2021）の提唱するファシリテーション基礎スキルを用いて題材づくりを行うこととした。研究授業の分析から、ファシリテーション基礎スキルを用いた題材づくりを行うことは、学習の過程に音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付け、生徒が歌唱表現を創意工夫することに有効であることが分かった。

I 研究題目設定の理由

中学校音楽科の表現領域の歌唱分野では、思考力、判断力、表現力等として、歌唱表現を創意工夫することが求められている⁽¹⁾。また、中学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編（文部科学省、平成30年、以下「29年解説」とする。）には、音楽科の指導上の配慮事項として音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けることが挙げられており、言葉によるコミュニケーションが、結果として音や音楽によるコミュニケーションを一層充実させることに結び付いていくよう指導を工夫することが求められている⁽²⁾。

所属校の生徒23名に実施した歌の授業についてのアンケート結果を図1に示す。図1から、音楽の授業で歌うことが好きな生徒は69.5%であることが分かる。同じアンケートでは、「楽しく歌うとすっきりする。」という記述もあり、歌唱表現の楽しさを感じて活動している生徒の様子がうかがえる。また図1から、人と話し合う活動や、自分の考えや思いを他の人に伝えることについても、肯定的に捉えている生徒が多いことが分かる。同じアンケートでは、話し合い活動について、「相手の気持ちが分かる。」「同じ人だけではなく、いろいろな人と交流できる。」「楽しい。」といった記述があり、言葉によるコミュニケーションの価値に気付いている生徒の様子が見られた。一方図1からは、「どう歌うかについて、先生の指示がある方が助かる。」と答えた生徒は82.6%であるのに対し、「自分で考えて活動できる時間がもっとあるといい。」と答えた生徒は47.8%と少なかったことが分かる。同じアンケートでは、話し合い活

動で「何をすればよいか分からない。」という記述もあった。これらのアンケート結果から、大半の生徒が歌唱表現の楽しさを感じ、言葉によるコミュニケーションの価値に気付いているものの、指導者の指示を頼りとし、受動的に授業に参加している生徒も一定数いることが明らかとなった。この背景には、生徒の創意工夫を促すための工夫、特に音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けることが十分にできていないという課題があると考えた。

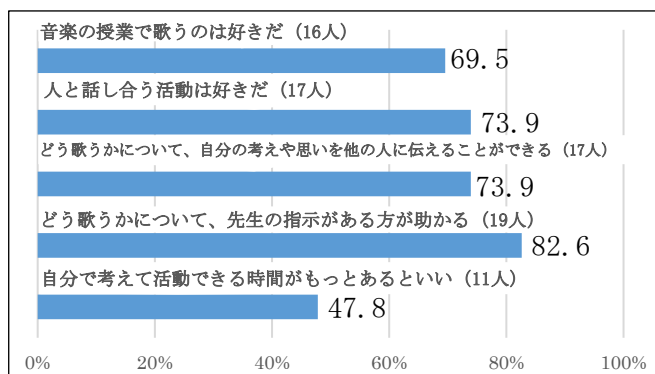


図1 歌の授業についてのアンケート結果 (n=23)

中央教育審議会は、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適学びと、協働的な学びの実現～（答申）（令和3年）の中でファシリテーション能力を教師に求める資質・能力の一つに挙げている⁽³⁾。

中野民夫（2021）は、参加型の場を創るファシリテーションのスキルを五つに整理し、ファシリテーション基礎スキルとして定義した⁽⁴⁾。このファシリ

テーション基礎スキルを用いた少人数授業の実践では、人と話すことの楽しさを感じ、参加者のコミュニケーションに対する苦手意識が薄らぐことが分かっている。筆者は、このファシリテーション基礎スキルを歌唱の題材づくりに用いることで、生徒の言葉によるコミュニケーションを促すことができるのではないかと考えた。

以上のことから本研究では、中野が提唱したファシリテーション基礎スキルに基づいた題材づくりを行うことで、音楽科の特質に応じた言語活動を充実させ、音楽科で育成を目指す思考力、判断力、表現力等である歌唱表現を創意工夫することを促すことができると考え本研究題目を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 歌唱表現を創意工夫する学習指導の工夫

(1) 歌唱表現を創意工夫するとは

「29年解説」には「歌唱表現を創意工夫するとは、曲に対する自分のイメージを膨らませたり他者のイメージに共感したりして、音楽を形づくっている要素の働かせ方などを試行錯誤しながら、表したい歌唱表現について考え、どのように歌唱表現するかについて思いや意図をもつことである。」¹⁾と示されている。歌唱表現を創意工夫するとは、例えば「優しい感じの歌だ。」というイメージをもった曲に対し、優しい感じを表すために声の音色や強弱について様々に歌い試す中で、「優しい感じにするために、柔らかい声で、旋律の上がり下がり動きに合わせて自然な強弱変化を付けて歌いたい。」などのような思いや意図をもつことである⁵⁾。

本研究は「29年解説」の定義に沿って進めることとする。

(2) 歌唱表現を創意工夫する学習指導について

「29年解説」では、思いや意図は創意工夫の過程において、歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、更に深まったり新たな思いや意図となったりすると示されている⁶⁾。

松永洋介(1998)は音楽は表現の手段であり、そこにはイメージが存在すること、またイメージは変容していくことを述べている⁷⁾。永田尚子(2004)は、歌唱教材の学習において、生徒の音楽的な思考は、これから再表現しようとする曲と出会い、内界に思いやイメージをもち、この内界の思いやイメージから、自分なりの音楽表現を生み出していく過程で働くと考えられている⁸⁾。これらのことから、イメージは音楽と出会うことで生まれ、再表現しようとする過程で変容するものであることが分かる。

以上のことを踏まえ本研究では、歌唱表現を創意工夫する学習指導を、生徒が試行錯誤する中で、変容するイメージを基に、思いや意図を深めたり新た

なものにしたりする学習過程を設定するものとして進めることとする。

(3) 歌唱表現を創意工夫する学習指導の工夫

音楽科の指導上の配慮事項として示されている音楽科の特質に応じた言語活動は、音楽活動と往還するものである⁹⁾。「29年解説」には、「音楽科の学習においては、言葉によるコミュニケーションを適切に位置付けることによって、音や音楽によるコミュニケーションを充実させることができる。」²⁾とある。音楽によって喚起された自己のイメージや感情、思いなどを他者と伝え合ったり、他者がどのようなことを意図しているのかをよく考えて、それに共感したりするためには、言葉によるコミュニケーションが必要となる。また、言葉によるコミュニケーションによって生じたイメージや感情、思いなどを音で伝え合ったり音楽で確認し合ったりするためには、音や音楽によるコミュニケーションが必要となる。つまり、言語活動と音楽活動の往還を意識することが学習指導の工夫として求められている。

ここで、歌唱の学習活動例を表1に示す。表1は従来筆者が教師用指導書に基づいて展開していた学習活動の一例である。

表1 歌唱の学習活動例

対象学年 第1学年 教材曲「浜辺の歌」 指導事項 ア、イ(ア)、ウ(ア) 要素 リズム、旋律、強弱、形式 ——音や音楽によるコミュニケーション ——言葉によるコミュニケーション	
時	●めあて ○学習内容 ・学習活動
1	○本題材の見通しをもつ。 ・小学校で学んだ日本歌曲を歌う。 ・本題材では、我が国で長く歌われ親しまれている「浜辺の歌」を歌い、歌唱表現を創意工夫することを知る。 ●歌詞の情景や曲想に関心をもち、旋律や強弱などの特徴を捉え、曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりを理解する。 ○歌詞の情景や曲想に関心をもち。 ・範唱を聴いて印象などを自由に話し合う。 ・作詞者、作曲者を知る。 ・「浜辺の歌」を歌えるようにする。 ・全体的な雰囲気について感じたことをワークシートに書く。 ○歌詞の内容や音楽の構造の特徴を捉え、曲想との関わりについて理解する。 ・音楽の特徴を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気について感受したことをワークシートに書く。 ・歌詞から想像した情景や、詩のリズムなどの特徴をワークシートに書く。 ・ワークシートに書いたことを発表し合い、他者の意見を参考にし、必要に応じてワークシートに書き加える。 ・知覚したことと感受したこととの関わりや、歌詞の内容との関わりについて、適宜、関係する記入内容を線で結ぶ。 ○歌詞の情景を想像したり、音楽の構造を意識したりしながら歌う。 ・曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりを意識しながら、全体で歌う。

2	●どのように歌うかについて思いや意図をもち、創意工夫を生かして歌う。 ○曲想や歌詞の内容を味わい、音楽の構造との関わりを踏まえて、音楽表現を追求する。 ・前時に知覚したことと感受したこととの関わりについて振り返りながら歌う。 ・どのように歌いたいかについて思いや意図をもち、ワークシートに書く。 ・4人グループで意見交換し、特に表現を創意工夫したいフレーズを選び、どのように歌いたいかなどについてワークシートに書く。 ○グループごとに思いや意図をもって歌う。 ・グループごとに追求した表現を発表する。 ・他のグループの発表を聴いて気付いたことをワークシートに書く。 ○題材における学習を振り返る。 ・我が国で長く親しまれている歌曲のよさについてまとめる。 ・題材を通して学んだことを、ワークシートに書く。 ・よさを味わいながら全体で歌う。
---	--

表1から、歌唱の学習活動例には、音や音楽によるコミュニケーションより言葉によるコミュニケーションが多いことが分かる。特に第1時には、言葉によるコミュニケーションが多く設定されているが、言語活動と音楽活動の往還が少ないため、結果として音や音楽によるコミュニケーションを一層充実させることに結び付いている学習指導になっているとは考えにくい。

河合紳和（2024）は、生徒が自ら音楽に対する感性を働かせ、よりよい質の高い学びにつなげるためには、見方・考え方を働かせることができるような場面設定や発問などの効果的な手立てが必要になってくると述べている⁽¹⁰⁾。また、野浪俊子（1998）は、子供たちの感受性等は、イメージから音へ変換される過程において培われると述べている⁽¹¹⁾。これらのことから、歌唱表現を質の高い学びにするためには、イメージから音へ変換される過程において、音楽的な見方・考え方を働かせるための学習過程をデザインすることが必要だと考える。

「29年解説」には、音楽的な見方・考え方とは、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること」³⁾だと示されている。また、音楽によって喚起されたイメージや感情を伝え合い、友だちの感じ方や考え方等に共感しながら自分の感じ方や考え方等を深めていくためには、言葉によるコミュニケーションが必要となると述べられている⁽¹²⁾。

中野（2021）は、学びのデザイン⁽¹³⁾として、ファシリテーション基礎スキルを示している。このファシリテーション基礎スキルを用いた実践では、言葉によるコミュニケーションが活性化することが分かっている。この考え方をを用いて学習過程をデザインすることで、イメージから音へ変換される過程におけ

る言語活動を適切に位置付け、生徒の創意工夫を促すことができると考え、本研究を進めることとする。

2 ファシリテーション基礎スキルを用いた題材づくり

(1) ファシリテーション基礎スキル

中野（2021）は、ファシリテーションを「人々が集い、何かを話し合ったり、学んだり、創造しようとするとき、そこにいる人々が遠慮なく発言し参加できるような場をつくり、円滑なコミュニケーションで意見や感情のやりとりをスムーズにし、協働や共創の過程を実り多いものになるように促す方法である。」⁴⁾と定義している。

中野（2021）を基に筆者がまとめた中野のファシリテーション基礎スキルを図2に示す⁽¹⁴⁾。

図2の①場づくりは、学習者の物理的距離、心理的距離を縮め、活発な対話を促進することである。②グループサイズは、対話を行う人数のことである。③問いは、対話を生むために指導者が示す共通のテーマのことである。④見える化は、学習者が考えたことをアウトプットすることである。⑤プログラムデザインとは、ゴールに向けて①～④をデザインすることである。

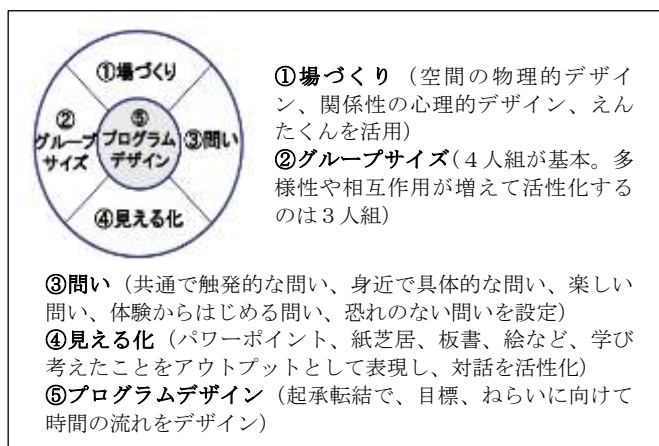


図2 中野（2021）のファシリテーション基礎スキル

(2) ファシリテーション基礎スキルを用いた題材づくり

ファシリテーション基礎スキルを用いた題材とは、図2に示す中野のファシリテーション基礎スキルを用いて構想した題材のことである。

音楽科の学習では、音楽活動と言語活動の往還を意識することが大切である。中野のファシリテーション基礎スキルを用いて歌唱の題材づくりをするに当たり、音楽科におけるファシリテーション基礎スキルを図3に示す。

①場づくり（参加型の場をデザインするために、音によるチェックインを活用）
②グループサイズ（3～4人グループで構成し多様なイメージが生まれやすいように配慮）
③問い（共通体験を促す問い、歌いたくなる問い、音からはじまる問い、こだわりをもつ問い等を設定）
④見える化（リトミックスカーフ、記号、要素、身体表現、画像など、思いや意図を表現し、言語活動を活性化）
⑤プログラムデザイン（創意工夫を促すことをねらいとした音楽活動と言語活動の往還のある題材を構想）

図3 音楽科におけるファシリテーション基礎スキル

①場づくりでは、学習者の物理的距離、心理的距離を縮め、活発な言語活動を促進するため、森雅浩（2009）が提唱しているチェックインを取り入れ、音によるチェックインとして筆者の考案する帯活動オープンtuttiを取り入れる⁴⁴。②グループサイズは、多様なイメージが生まれやすいよう3～4人グループとする。③問いは、音楽活動を促す問いと言語活動を促す問いを設定する。④見える化では、リトミックスカーフや身体表現などを通して思いや意図を表現させることで、言語活動を活性化する。⑤プログラムデザインは、創意工夫を促すことをねらいとした音楽活動と言語活動の往還のある題材を構想された全体を示す。

ファシリテーション基礎スキルを用いて構想した題材を表2に示す。表2は、歌唱の共通教材「浜辺の歌」を取り上げた題材である。

表2 ファシリテーション基礎スキルを用いて構想した題材

対象学年 第1学年 教材曲「浜辺の歌」	
指導事項 ア、イ（ア）、ウ（ア） 要素 旋律	
——音や音楽によるコミュニケーション	
~~~~言葉によるコミュニケーション	
時	●めあて ○学習内容 ・学習活動
1	・既習曲を<u>歌う</u>。     ・1番の歌詞で、旋律、リズムをつかんで<u>斉唱する</u>。     ・本時の流れを確認する。         ●歌詞の情景や曲想に関心を持ち、旋律や強弱などの特徴を捉え、曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりを理解する。     ○歌詞の情景や曲想に関心をもつ。       ・範唱を聴いてイメージしたことを自由に話し合う。     ・歌詞の表す映像を<u>視聴する</u>。     ・①オープンtuttiを用いてチェックインを行う。     ・「貨物列車」を取り上げ、リトミックスカーフを活用しながら、<u>音楽に合わせて身体を動かしながら歌う</u>。     ・②1グループ3人組をつくる。     ・歌詞の中から印象深い箇所を取り上げて、どうしてその箇所を取り上げたのか、どのように歌えば思いや意図が伝わるのか、話し合いながら歌ってみる。       ○選択したツールを活用して表現方法を考え、試す。       ・③歌唱音源、伴奏音源、ボール、リトミックスカーフ、タブレット、ワークシート等、生徒が話し合いながら自由に選択して<u>歌ってみる</u>。    - 問い例) 何を使ってみたいですか。     ・④グループの中で、自分の考えや思いを<u>相談しながら試行錯誤</u>する。     ・③思いや意図を共有し、グループ内の<u>アドバイスを基に歌唱表現を工夫</u>してみる。    - 問い例) どんな動きを付けてみたいですか。

	・④思いや意図が具体的に考えられるように、ツールを使ってさらに<u>表現を工夫</u>する。     ・イメージしていた表現になっているか、振り返る。
2	・前時と同じグループに分かれる。     ・①②オープンtuttiを用いてチェックインを行う。     ・前時を想起して、リトミックスカーフ等を活用しながら、<u>音楽に合わせて身体を動かしながら歌う</u>。     ・作詞者、作曲者について<u>知る</u>。     ・全体で<u>歌う</u>。         ●どのように歌うかについて思いや意図をもち、創意工夫を生かして歌う。     ○曲にふさわしい歌唱表現を工夫する。       ・前時とは異なる1グループ3人組をつくる。     ・前時の学習に関する簡単な質問に<u>答える</u>。     ・リトミックスカーフ等を使って<u>歌ってみる</u>。     ・本時の流れを確認する。     ・④それぞれの工夫を生かして、グループで一つの作品に<u>相談しながら仕上げ</u>ていく。     ・③自分たちがイメージしている表現になっているか、<u>歌いながら意見を出し合い</u>、さらに<u>表現を練る</u>。    - 問い例) 表したいイメージに近づいてきましたか。     ・③他のグループの<u>発表を聴き合い</u>、<u>意見交流</u>を行う。    - 問い例) イメージが広がったのは、どのグループの発表でしたか。     ・④意見交流した意見を基に、様々な<u>表現方法</u>でさらに<u>歌唱表現を試してみる</u>。     ・グループごとに創意工夫した歌唱表現を全体で<u>発表</u>し、気付きを共有する。     ・自分一人で歌うとしたらどのように歌いたいか、思いや意図をワークシートに<u>書く</u>。     ・全体で<u>歌う</u>。

表2は、表1に比べ、音や音楽によるコミュニケーションが増えている。また、言語活動と音楽活動の往還を意識したデザインにより、言葉によるコミュニケーションが、結果として音や音楽によるコミュニケーションを充実させることに結び付く学習指導になっている。

### III 研究の仮説及び検証の視点と方法

#### 1 研究の仮説

ファシリテーション基礎スキルを用いた題材づくりを行えば、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に設定することができ、歌唱表現の創意工夫を促すことができるだろう。

#### 2 検証の視点と方法

検証の視点と方法を、表3に示す。

表3 検証の視点と方法

	検証の視点	検証の方法
1	ファシリテーション基礎スキルを用いた題材づくりを行うことで、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けることができたか。	授業観察 アンケート インタビュー
2	生徒にどのように歌うかについて思いや意図をもたせることができたか。	授業観察 ワークシート アンケート インタビュー

## IV 研究授業の実際と分析

### 1 研究授業の概要

表2に示した題材を、第1学年10名（生徒A～J）に対し実施した。また、表2に示した題材を、教材曲を「夏の思い出」に変えて第2学年6名（生徒K～P）に対し実施した。

### 2 ファシリテーション基礎スキルを用いた題材づくりを行うことで、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けることができたか

#### (1) ①場づくり

表2に基づいて実施した研究授業では、図3に示したように、参加型の場をデザインするために、授業の初めに音によるチェックイン「オープンtutti」を設定した。オープンtuttiでは、「貨物列車」や「うみ」を用いたリレー唱や身体表現活動を行った。

事後アンケートでは、オープンtuttiについて93.7%の生徒が肯定的な評価を示した。オープンtuttiに関するインタビュー（抜粋）を表4に示す。

表4 オープンtuttiに関するインタビュー（抜粋）

第1学年	生徒A	オープンtuttiをすることで空気が和んで授業がやりやすい。みんなと協力してできたから、楽しかった。
	生徒H	普段、みんなと遊ばないから楽しかった。
	生徒I	周りの空気が楽しくなって、周りの気持ちが上がったし、オープンtuttiを入れることでみんなが楽しかった。よし、がんばろう！という気持ちになった。
第2学年	生徒M	その後の授業のやる気が上がりました。
	生徒P	みんなの雰囲気が良くなったり、和らいだりした。

表4より、生徒は①場づくりについて「空気が和んで授業がやりやすい。」「その後の授業のやる気が上がりました。」等の感想をもったことが分かった。参加型の場をデザインするために、授業の初めに音によるチェックイン「オープンtutti」を設定したことで、授業への参加意欲を促すことができたと言える。

このことから、本研究で設定したオープンtuttiが①場づくりとして機能したこと、また、①場づくりを通して、言語活動の素地を培うことに有効であったと考える。

#### (2) ②グループサイズ

表2に基づいて実施した研究授業では、図3に示したように、多様なイメージが生まれやすくするために、3人グループを基本として設定した。

事後アンケートでは、グループサイズについて56.3%の生徒から「丁度よい。」と回答があった。グループサイズに関するインタビュー（抜粋）を表5に示す。

表5 グループサイズに関するインタビュー（抜粋）

第1学年	生徒D	10人くらい。多い方がみんなの意見が聞けるし、工夫した方が良いところをもっと意見が出せるから。
第2学年	生徒L	たくさんがいいとは思わない。3人でいい。多かつたらいろんな意見が出るかもしれないけれど、自分が歌えているのか、歌えていないのか分からないから、少ない方が歌えているかどうか分かる。
	生徒M	2人がいいと思う。3人の時よりも一人一人の具体的な意見が聞けるから。時間的にも良い。

表5から、生徒は②グループサイズについて、「たくさんがいいとは思わない。（中略）少ない方が歌えているかどうか分かる。」等と感じたことが分かった。一方、具体的な意見が聞けるという理由でもっと小さなサイズがよいと感じた生徒や、多様な意見が生まれるという理由でより大きなサイズを希望する生徒もいることが分かった。

このことから、歌唱の題材では、3人グループが多様なイメージをもたせることに有効である一方で、学習内容によってサイズの調整が必要であると言える。生徒の学習状況を把握しながら、時には生徒にグループサイズの調整を委ねるなど、より多様なイメージが生まれやすくなるように、柔軟なサイズ設定が必要だと考える。

#### (3) ③問い

表2に基づいて実施した研究授業では、図3に示したように、共通体験を促したり、こだわりをもたせたりするために、次の二つの問いを設定した。

- この曲の一番の聴かせどころはどこですか？  
 ㊦どのように表現を工夫したらよいですか？

二つの問いを受けた後の生徒の活動の様子（抜粋）を表6に示す。

表6 第1学年生徒の活動の様子（抜粋）

発言者	—音や音楽によるコミュニケーション
	~~~~言葉によるコミュニケーション、「」発言
教師	□「この曲の一番の聴かせどころって、どこだと思います？近くの人と話してみよう。」
生徒A～J	話し合い、教師の問いかけに対して挙手をする。
教師	「3段目と4段目に分かれたね。それでは歌って確かめてみよう。」
生徒A～J	全員で歌って3段目と4段目の違いを確かめる。
教師	「どうだった？近くの人と交流してみよう。」「3段目だと思う人？4段目だと思う人？」
生徒A～J	話し合い、教師の問いかけに対して挙手をする。
教師	「全員が3段目なんだね。なんでそう感じたのかな。」（省略）
教師	㊦「この曲は、どのように表現を工夫したらよいですか？例えば3段目の風はどんなふうにして歌う？いろいろ試してみると良いよ。」（省略）
生徒I	カードを引いて歌う。
教師	カードに合わせて歌ってみせる。
生徒I	グループのメンバーとアカペラで歌って試す。
生徒I	「地声で歌ってみる？裏声で歌ってみる？」
教師	スカーフの活用を促す。
生徒I	スカーフを持って「風って、どんなイメージ？」
生徒F	「シュー」っと言って、スカーフを動かす。
生徒B、F	風をイメージしてスカーフを動かしている。
生徒I	「風のところを、そよ風に。」

生徒F	「台風、台風。」
生徒B	「優しく歌う？」
生徒B、I	「地声よりちょっと高めの優しい声がいい。」
生徒B、F、I	3人で3段目を歌い試している。
生徒F	裏声を使って歌う。
生徒I	「そよ風だから、ゆっくりよ。」
生徒B	「だからゆっくりよ。」3段目を歌い試す。
生徒B	「もう1回やろう。」
生徒B、F、I	3人で3段目をアカペラで歌い試している。
生徒I	「もうちょっと柔らかく？」歌い試す。
生徒B	「かすれたような感じ？」歌い試す。
生徒I	「それぞれが自分なりに思ったように歌おう。」

表6から、生徒は、問いをきっかけに、共通体験をもととしたり、こだわりをもつために、言葉によるコミュニケーションと、音によるコミュニケーションを繰り返したりしていたことが分かった。特に生徒B、F、Iのやりとりでは、試行錯誤する中で思いや意図を深めたり新たなものにしたりする姿がうかがえる。

このことから、本研究で設定した問いが、③問いとして機能し、③問いを通して、言語活動と音楽活動の往還を促すことができたと考える。

(4) ④見える化

表2に基づいて実施した研究授業では、図3に示したように、思いや意図を表現し、言語活動を活性化させるために、リトミックスカーフを活用した。事後インタビューでは、リトミックスカーフを用いた活動について75%の生徒が肯定的に捉えていた。

リトミックスカーフを活用する生徒の様子(抜粋)を表7に示す。

表7 第1学年リトミックスカーフを活用する生徒の様子(抜粋)

発言者	——音や音楽によるコミュニケーション ——言葉によるコミュニケーション、「」発言
生徒G、H	友だちと一緒に <u>旋律に合わせてスカーフを動かす。</u>
生徒G	<u>音楽に合わせてスカーフを身体に巻き付ける。</u>
生徒J	小さいスカーフを持ち、小さく振り、様々に動かした後、頭にのせる。小さい水色のスカーフを音に合わせて揺らす。
教師	「歌い方はどうなりそう？」
生徒G	「「風」のところから盛り上がるから「ぜ」を強く歌う。」
生徒H	「強くできない。」
生徒G	生徒Hに「 <u>自信をもって大きな声で。</u> 」と声を掛ける。
教師	「こんな風に？」歌ってみる。
生徒G	教師のまねをして「風の音よ 雲のさまよ」の部分を <u>歌い試す。</u>
教師	「このスカーフを使ってどういう風に表現する？」
生徒G、H	大きなスカーフを持って、「風の音よ」の旋律が高くなるところで、スカーフを高く上げて歌う。
生徒G	飛躍する <u>旋律の高さに合わせて、ジャンプしながらスカーフを高く上げて歌う。</u>
生徒H	歌い試す。(省略)
生徒G	「 <u>グループで盛り上がるのところに強い風が吹いていて、懐かしさを思い出しているようにスカーフを使って大きく表現して歌う。</u> 」

表7から、生徒は、リトミックスカーフを使うことで「このように歌いたい、だからこのように声を出そう。」という思いや意図を明確にしていたことが

分かる。また、生徒Gは授業後のインタビューにおいて、「リトミックスカーフを使うと曲の強弱とか旋律が分かりやすい。」「みんなでやると盛り上がり、いろんな意見が聞ける。」と述べた。自分や相手の思いや意図が、視覚的に共有できたことで、その後の言語活動が活性化されたことが分かった。

また、事後アンケートでは、旋律の特徴を把握しやすくするためにリトミックスカーフを取り入れたことで、「表現が変わる。」と肯定的に答えた生徒は81%であった。多くの生徒にとってリトミックスカーフが旋律の特徴を捉えることに効果的であり、歌唱表現を創意工夫する活動で有効的だったと言える。

これらのことから、本研究で活用したリトミックスカーフは④見える化として機能したこと、また、④見える化が、言語活動と音楽活動の往還を促すことにつながったと考える。

(5) ⑤プログラムデザイン

研究授業の基とした表2は、図3に示したように創意工夫を促すことをねらいとして、音楽活動と言語活動の往還のある題材を構想したものである。

事前・事後アンケートの比較(抜粋)を表8に示す。表8から「自分なりに工夫して歌うために最も必要な活動は何ですか。」という質問に対し、教師の指導や暗譜等に注目していた生徒が、「話し合い」、「交流」等の言葉によるコミュニケーションに着目するように変化したことが分かる。

表8 事前・事後アンケートの比較(抜粋)

	生徒	事前アンケート	事後アンケート
第1学年	生徒D	相手の意見をすぐに否定しない。	もっと積極的に自分の意見を言う。
	生徒E	一人ずつ意見を聞く。	グループで話し合う。
	生徒H	先生の指導。	グループで話し合う。
	生徒J	歌い方のモデル。	話す時間を増やす。
第2学年	生徒K	楽譜を見る。	もっと話す時間を増やす。
	生徒L	楽譜を見ずに前を見て歌う。	ポイントをまとめる。
	生徒P	みんなと交流する。	グループでの交流。

また、授業の感想を聴き取った授業後のインタビュー(抜粋)を表9に示す。

表9 授業後のインタビュー(抜粋)

第1学年	生徒I	最初にアクティビティを入れてみんなが楽しめる活動や優しくアドバイスし、先生がやっていた色んなカードで手助けしたい。
	生徒D	緊張する人が多いから、貨物列車で遊びを入れたい。
第2学年	生徒N	めちやくちや歌います。
	生徒O	交流。話し合い。歌い試す活動です。
	生徒P	話し合いを多めにして、みんなに分かりやすく。緊張が和らぐホワホワした空間にしたい。

表9からは、生徒が、ファシリテーション基礎スキルを用いた題材づくり(⑤プログラムデザイン)を通して、表現の質をさらに高めたいという学ぶ意欲をもったことや、音楽活動の充実が学習の質を高めることを実感している様子が見ええた。

これらのことより、ファシリテーション基礎スキルを用いた題材づくり（⑤プログラムデザイン）を行ったことが、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けることにつながったと考えた。

以上のことから、ファシリテーション基礎スキルを用いた題材づくりを行うことは、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けることに有効であると言える。

3 生徒にどのように歌うかについて思いや意図をもたせることができたか

(1) アンケート

研究授業実施前と実施後に行ったアンケート調査の結果（抜粋）を図4に示す。

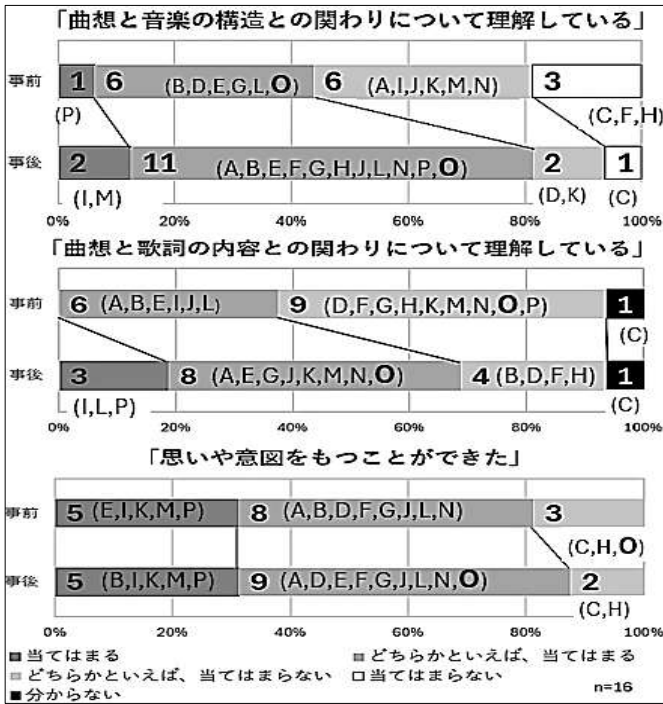


図4 事前・事後のアンケート比較（生徒）

図4からは、思いや意図をもつことができたかについて、大きな変化は見られなかったことが分かる。しかし、唯一回答が肯定的なものに変化した生徒Oに着目すると、生徒Oは、曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解していると自己評価していることが分かる。曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解することは、音楽科で育成する資質・能力のうち、知識に当たり、思いや意図は、知識を得たり生かしたりしながら膨らませていくものである⁽¹⁵⁾。③問いや④見える化を組み込んだ本題材のプログラムデザインが、知識の習得を促し、その結果思いや意図をもたせることにつながるものであったと考える。

(2) 授業観察

研究授業では、生徒が何度も歌い試しながら表現

を創意工夫する姿が見られた。生徒が歌い試しながら表現を創意工夫する様子（抜粋）を表10に示す。

表10から、生徒がリトミックスカーフを活用したことで、旋律の特徴に着目しながらどのような声の音色で表現するか試行錯誤していることが分かる。

表10 第2学年生徒が歌い試しながら表現を創意工夫する様子（抜粋）

教師	「3段目と4段目を取り出して歌ってみるね。どんな感じで歌おうと思っている？」
生徒P	「3段目だけ遅くしたい。」
教師	「なんでそこを遅くしようと思っているの？」
生徒P	「音程が合うっていうか・・・思い出が詰まっているから盛り上がっていくところ。特に思い出が詰まっているから。「水のほとり」が。」
教師	生徒Pにリトミックスカーフを渡す。
生徒N	水色のリトミックスカーフを選ぶ。
生徒P、N	スカーフを揺らしながら歌う。旋律が上がるときにリトミックスカーフを高く動かし振っている。
生徒P、N	「夏の思い出」をリトミックスカーフを揺らしながら2回歌う。
生徒P	「水のほとり」の歌詞のところで、一音一音スカーフを動かしながらテヌートの長さを試している。
生徒P	表現カードを取りに行く。
生徒P	歌い試す。
生徒N	3段目を歌い試す。 歩きながら、3段目、4段目を歌い試す。

授業観察では、16名中16名の生徒が様々に歌い試す様子が見えた。

(3) ワークシート

研究授業で用いたワークシートに生徒が記述した内容（抜粋）を表11に示す。

表11に示したように、多くの生徒は、「3段目をやさしく風が吹いているように、そよ風が吹いているように歌おうと思った。」「昔を思い出するように、人に昔のことを話してあげているようにやさしく歌おうと思いました。」など、どのように歌うかについて思いや意図をもつことができていた。

表11 生徒のワークシート記述（抜粋）

第1学年	生徒A	「ああ、なつかしいな。」と思うことを意識して歌詞によって強弱を変えて歌おうと思い、旋律の高さを良い具合になるように気を付けた。
	生徒B	3段目を優しく風が吹いているように、そよ風が吹いているように歌おうと思った。夏の楽しかった思い出を思い出すように大きな声で歌おうと思い、強弱に気を付けた。
	生徒E	クレシェンドやデクレシェンド、fなど、強弱を表わす記号が「浜辺の歌」は多かったのも、その記号がなぜそこについているのかも考えて、旋律と歌詞、強弱が合うように歌おうと思いました。また、自分なりに3段目にどのような思いがこめられているのか、考え、歌おうと思い、実践することもできました。
第2学年	生徒L	昔を思い出するように、人に昔のことを話してあげているようにppのところはやさしく語りかけるように歌おうと思いました。
	生徒M	全体的になめらかに歌いたいです。けれど、最後は少しさみしそうに歌いたいです。理由は、戦後に作られた曲と知って、作者さんは「はるかなおげ」がさみしいと感じたのではないかなと思ったからです。
	生徒O	「みずばしうのはなが」など、なつかしさや、そんな思い出が恋しいような感じで歌いたい。記号を意識して表現したい。

一方、16名中2名の生徒は思いや意図をワークシートに記述していなかった。この2名の生徒のワークシートの記述(抜粋)を表12に示す。

表12 生徒のワークシート記述(抜粋)

第1学年	生徒C	やさしく歌いたかったけれど、声が出なかった。リズム、流れに気を付けて歌う。声の高さに気を付けた。
	生徒H	なめらかだったり強かったり色々な感じ方があったので、それらを意識し、スカーフをなめらかに動かして歌った。

表12から、生徒Cは、音楽の構造について気付くことはできているが、それをどのように歌うかについての思いや意図をワークシートに記述することはできていない。しかし、研究授業後のインタビューにおいて、生徒Cは「リトミックスカーフを動かすと、声の出し方が変わると思う。」と話している。また、生徒Hは、他者の意見を参考にすることはできているが、具体的にどのように歌うかについての思いや意図をワークシートに記述することはできていない。しかし、撮影した動画には、生徒Hが他の生徒と話し合いながらリトミックスカーフを使って歌い試す様子が記録されており、表現を創意工夫しようとしていることがうかがえた。これらから、生徒C、Hは思いや意図をもっていたものの、ワークシートに思いや意図を記述できなかった状況にあることが推察された。図4から、生徒C、Hは、音楽科で育成すべき知識である「曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わり」についてあまり理解していないと自己評価していることが分かる。生徒C、Hがワークシートに思いや意図を記述することができなかったのは、音楽科で育成すべき知識が十分に獲得できなかったためではないかと考える。研究授業で使ったワークシートには、16名中14名の生徒が思いや意図を記述していたが、より多くの生徒が思いや意図を言語化できるよう、今後も指導方法の工夫・改善を継続していきたい。

以上のことから、どのように歌うかについて思いや意図をもつことができたかを調査したアンケート上の数値の変化は少ないが、思いや意図の質を向上させることはできたと考える。

V 研究のまとめ

1 研究の成果

ファシリテーション基礎スキルを用いて題材づくりを行うことは、学習の過程に音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けることに有効であり、生徒が歌唱表現を創意工夫することにつながる事が明らかになった。特に、①場づくりや④見える化は、生徒の創意工夫を促すことに有効であることが分かった。

2 研究の課題と今後の方向性

事後アンケートでは、「思い通りに歌うことができませんでしたか。」という質問に対して、43%の生徒が否定的な回答をしている。つまり、研究授業では、ねらいとしていた歌唱表現を創意工夫することはできたものの、思いや意図を歌唱で表すための技能についての指導が不足していたことが考えられる。今後は、技能の習得についても達成感をもてるような工夫について考え授業改善していきたい。

【注】

- (1) 文部科学省(平成30年):「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編」教育芸術社p.37に詳しい。
- (2) 文部科学省(平成30年):前掲書p.100に詳しい。
- (3) 中央教育審議会(令3年1月26日):「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」p.85に詳しい。
- (4) 中野民夫(2021):「参加型の場を創るファシリテーション:学び合いの現場から」「ワークショップジャーナルフリー」60巻6号に詳しい。
- (5) 文部科学省(平成30年):前掲書p.38に詳しい。
- (6) 文部科学省(平成30年):前掲書p.14に詳しい。
- (7) 松永洋介(1998)「音楽創作活動におけるイメージの形成と音への具現化に関する一考察—小学校2、4、6年生の音楽創作活動の分析を通して—」「日本教科教育学会誌」第21巻第1号pp.59-65に詳しい。
- (8) 永田尚子(2004):「歌唱教材における生徒の音楽的思考の発展を促す学習過程の構成」「学校音楽教育研究」8巻pp.173-182に詳しい。
- (9) 文部科学省(平成30年):前掲書p.100に詳しい。
- (10) 河合紳和(2024年):「歌唱表現の創意工夫に関する指導についての一考察」「愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻教科開発学論集」第12号pp.61-70に詳しい。
- (11) 野浪俊子(1998年):「1表現におけるイメージの動き(1)子どもの表現活動の展開」「学校音楽教育研究」2巻pp.53-56に詳しい。
- (12) 文部科学省(平成30年):前掲書p.100に詳しい。
- (13) 中野民夫(2021):前掲書pp.445-446に詳しい。
- (14) 森雅浩(2009年):「ファシリテーション—実践から学ぶスキルとこころ」岩波書店p.130に詳しい。
- (15) 文部科学省(平成30年):前掲書p.14に詳しい。

【引用文献】

- 1) 文部科学省(平成30年):「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編」教育芸術社p.38
- 2) 文部科学省(平成30年):前掲書p.100
- 3) 文部科学省(平成30年):前掲書p.10
- 4) 中野民夫(2021):「参加型の場を創るファシリテーション:学び合いの現場から」「ワークショップジャーナルフリー」60巻6号p.441

【参考文献】

- 「中学生の音楽1年指導書 研究編」(2021):教育芸術社pp.24-32